

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇二三年（令和四年）四月三〇日
第一號（通卷第四一號）



八大人「安晚帖」猫図（泉屋博古館蔵）

林石不三内出入王
許如王法華証象
第志新虎
足行
fiw

◆目録

- 卷頭言
- 二 卒論で「勉強」
大木 康
 - 四 先行研究論文の読み方教育
市來 津由彦
 - 六 「第九屆新子学国際学術研討会議」参加記
山田 俊
 - 八 象数易研究の現状と展望
藤田 衛
 - 十 国内学会消息（令和3年）
 - 十九 各種委員会報告
論文審査委員会／出版委員会／選挙管理委員会／将来計画特別委員会／研究推進・国際交流委員会
 - 二二 事務局より／評議員選挙について／メールアドレス登録のお願い
 - 二四 第74回大会開催のお知らせと研究発表の募集

編集●京都大学文学研究科 宇佐美文理
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
メールアドレス：gakkaidayonkyoio@gmail.com
発行●日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

卒論で「勉強」

大木 康
理事長

むかし尾上兼英先生からうかがったお話。先生が学生だったころ、倉石武四郎先生に、「先生はいつ勉強されるのでしょうか」とうかがわれたことがあるそうである。すると倉石先生はすかさず「わた

くしは学生さんの卒論で勉強いたしております」と答えられたとのこと。年の暮れから二月ごろにかけて、学生さんの卒論や修論を読むことになる。たしかに一番頭が柔らかく、エネルギーにあふれている学生さんの論文からは、毎年新鮮な知識を得させてもらっている。ただ、倉石先生がいわれたのは、おそらくそれだけのことではない。まずは論文の指導にあたって、適切な文献を紹介する必要があるだろう。それに加えて、論文をきちんと評価しようと思えば、学生さんが論文で引用している文章について、それが正しく引用されているかどうか、前後の文脈をきちんとおさえた上で引用しているかどうかを確かめるために、原典にあたりなおさなければならぬ。教師の側も学生さんと同様、いや、それ以上に「勉強」しなければ、論文を正しく評価することができないのである。現在東京大学東洋文化研究所に蔵されている、

経史子集、叢書、中文新学書、そして和書洋書にわたる膨大な書物からなる倉石文庫は、先生ご自身の研究もさることながら、さまざまなテーマをもって挑んでくる学生の論文に対応する「勉強」のために集められたものである。

わたしが広島大学に奉職していた時、横田輝俊先生が「われわれは『詩経』『楚辞』から魯迅まですべてに通じ、その上で一つのスペシャルを持たねばいかん」といわれた言葉も深く記憶に残っている（横田先生の場合、明代の詩文がそのスペシャルであった）。もちろん専門分化が進み、かつ世界中で著書論文が量産されている現在の状況では、いかな碩学であれ、一人ですべての分野を完全にカバーすることは不可能であろう。しかしそれにしても、そうした志は、当然持ってしかるべきものである。

中国学、そのうち文学の世界での研究活動を見ても、近年、六朝文学、中唐文学、古典小説等々、専門別の学会、研究会が盛んである。これはまぎれもなく専門分化の進行している現在の状況に対応しているわけであり、専門家が集まる会では、みな知識関心が共通しているから、より深い議論ができることはたしかである。しかし、それにしても「駅伝栄えてマラソン減ぶ」ではないが、「研究会栄えて学会減ぶ」となっては具合が悪かろう。

日本中国学会の大会のよい点は、広い範囲にわたるいくつもの部会が準備されていることである。自分の専門に近い分野の発表を聴くばかりでなく、専門外の分野の発表を聴き、専門外の人と話しをすることは、いわゆる耳学問、いつか自分の研究に役立つものであろう。自分の専門だけに閉じこもっているのは、やがて先細り、行きづまるであろうことは目に見えている。そもそも哲学、史学、文学といった区分にそぐわないのが中国学である。いわゆる文学分野の本を読むのに、経書や正史の知識なしですますことは不可能である。古典小説の研究をしていて、魯迅や鄭振鐸、戴望舒を知らずに過ごすことはできない。逆に現代の小説などを見ていると、時折古典詩の詩句が、さらりと出てくることがある。

今年の論文から

いつも卒論修論からは、いろいろ勉強させてもらうのであるが、今年の論文からもさまざまな分野にわたって、ずいぶん勉強させてもらった。自分の専門に近い明代文学の話で恐縮であるが、ここではその一つを紹介して、責めをふさがせていただくことにしよう。

今年読ませてもらった論文の一つに、明末の馮夢龍が編んだ短篇白話小説集「三言」の一つ、『古今小説』巻十八「楊八老越国奇逢」に触れたものがあった。元の時代のこと、陝西の人である楊八老は、妻と息子を家に残し、福建の彰州へ商売に出る。故郷へ帰ろうとしたところで、倭寇に捕らえられ、日本に連れて行かれてしまう。十九年の後、ニセ倭寇に仕立てられ、温州攻撃に加わった楊八老は、元軍の捕虜になったが、そこで役人になっていた実の息子と再会し、一家団円するという物語である。元の時代の話になっているが、実際には、倭寇が猖獗をきわめていた明代の状況を反映しているとされる。この話の中に、当時の倭寇の様子を描いた次の一節があった。

原來倭寇逢着中國之人、也不盡數殺戮。擄得婦女、恣意奸淫、弄得不耐煩了、活活的放了他去。也有有情的倭子、一般私有所贈。

そもそも倭寇が中国の人に会った時も、みなすべてを殺してしまったわけではありません。婦女を捕まえば、ほしいままに奸淫し、もてあそんでめんどろになると、生きたまま釈放したのです。なかには情のある倭子もあって、やはりひそかに贈り物をしたりするものもありました。

明代の中国で、倭寇の日本人をどう見ていたかがうかがわれる資料であり、倭寇研究でもたびたび引用される場所であるが、ここでふと面白いと思ったのが、「也有有情的倭子、一般私有所贈」、特に「一般」の二字である。この「一般」は「同様」の意味であろう。倭寇の日本人は、殺人強姦したい放題の極悪人どもであるが、なかには「有情」のものがいて、気に入った女性に贈り物

をしたりする奴もいる。そこに「一般」、つまり「中国の人と同じように」の二文字が加えられている。野蛮な日本人にも、情があって中国の人と「一般」な行動をするものがある。「情」の前では、中国人も日本人も同じ。「情」は、馮夢龍の文学を考える際のキーワードの一つである。

馮夢龍は、真なる情が表現された作品として、蘇州の民間歌謡を集めた『山歌』十巻を編纂している。馮夢龍は、当時の日本についての情報を集めた『日本考』をたしかに読んでいたことが知られる。『日本考』には、「山歌」と題して、色恋を詠じた当時の日本の小唄が紹介されている。

本誌巻頭言の依頼を受け、苦しまぎれに、読んだばかりの学生さんの論文から話題を提供させてもらったが、守秘義務違反、コンプライアンス違反などといわれなことを祈りたい。野間光辰『洛中獨歩抄』（淡交新社 昭和42年）を見ると、京都大学入試国語の珍答案がそのまま紹介されていたりする。おおらかなよき時代であった。

最後に日本中国学会の会務について。今年の5、6月ごろ、次期の評議員選挙が行われる予定である。例年の選挙の低投票率改善を目指し、今回はじめて電子投票を導入することにした。電子投票にあたっては、会員各位のメールアドレス登録が必須となる。この機会に改めてメールアドレス登録をお願いする次第である。なお、メールアドレスを持たない会員については、投票用紙による投票も可能である。詳しくは、本誌の評議員選挙に関するお知らせをご覧ください。

また、今年の10月8日（土）、9日（日）の両日にわたり、早稲田大学において、第74回大会が開催される。コロナウイルスの状況は、予断を許さないものがあるが、まずは4年ぶりの会場開催ができ、会員が一堂に会することを祈るばかりである。大会開催の予定については、随時ホームページに新しい情報を掲載するので、ご注意ください。いただければ幸いです。

コロナの暗雲はなかなか晴れないが、会員のみなさまのご健康、ご活躍をお祈りする次第である。

先行研究論文の読み方教育

市來 津由彦

博士課程大学院を持つ三つの大学の教壇に立ち、このたび退休した。この経緯を顧みて思うことあれば学会会員にお話し願えないかとの過分の思わぬ要請が、本『便り』編集担当の先生からあった。学

会に披瀝できることがもとよりあるはずもない。ただ2011年度以降、論文審査委員会委員を数期務め、審査の際に応募論文に準備不足を感じたことが時にあった。そのことに関連し、先行研究論文をより良く読むことが論文の良き作成に繋がるという趣旨で、三大学を通して授業として実施していた先行研究論文の読み方教育について述べようと思う。

ここで語る技法が良いということではない。こうした教育は博士前・後期課程の指導として各大学でおこない、内容もほぼあたり前のことに属する。ただそれゆえ説明は外部には現れにくい。しかし隣の庭ではより良くおこなっているかも知れない。教壇から離れた身にはもう無用なので、筐底に置くよりは良き方向を考える素材にしていたら幸いと考え、説明する次第である。

以下は、勤務した順では東北大学国際文化研究科で萌

芽し、広島大学文学研究科で定式化し、二松学舎大学文学研究科でも短期間、実施したものである。中心の広島大学期では、大学院入学後に認識を持つのでは遅いとみて、卒業論文教育の分野共同演習としてこの論文の読み方教育の科目を学部3年次に設定し、4年次も履修できるようにした。なお論文の書き方指導も必要ながら、この教育は卒論の個別指導でおこなうようにしていた。

以下、この広島大学期に定式化した線で説明する。本小文では説明を四段階にわけて述べる。下記1～3はこの企画の趣旨説明で年間の開講時当初の二回の授業を使用した。4が三回目以降の演習実施方式の説明である。

1. 「論文」の定義、先行研究理解の必要性

まず、論文とは何か、先行研究の消化がなぜ必要かといった前提的な事柄について理解すべきことを説いた。

「論文とは（中国思想文化（史）学のある問題の事実的内容について根拠をもって新見解を提起するもの」というのが、「論文」のおよその定義である。ここに言う「根拠」は主として文献資料を使用する。「新見解」の「新」は「現ないし旧」見解の把握があつて位置づけられ、それゆえ先行研究の理解が論文の構想を立てるのに必要な作業であり、必須のことと説いた。

2. 論文評価の視点

次いで論文評価の視点を、A B Cのように述べた。

- A 当該論文の意義、踏み出した一步はどこか、何か。それを導いたアイデア、新資料、新技法等は何か。
- B 根拠となる資料の読解とその使用は妥当か。Aの問題性の高さを支えるのが、この資料処理様態である。
- C 構成と文章表現が伝わるようにかつ論理的に作成されているか。

重要度順位はA→B→Cである。ただし読むときは、初め目に入るのはC、読了してAの概要が立ち現れるが、その実、Bの検討によってAが保証され、C B Aの順でAが明らかとなる。一方書くときは、Bの資料読解から出てきたAの問題提起を表現するためにCの構成において資料配置を考え文章化し、A B→Cの順となる。

3. 論文を読む、見ぬく

次に研究論文の読み方の手順を示した。解説にあたっては事例論文として 先師金谷治師の唐代思想を扱ったものを主に用いた（「劉禹錫の『天論』」）。節立てと節見出しはないが、構成と論旨が明確、中心資料に限られ、文章がわかりやすく、問題射程が古代から近世初頭までと長くて、またおうかがいしたい疑問のところもあるといった、学部生用の素材として有用ということのためである（その他の教材使用論文も、学部生が考えるのに好適という視点で各担当教員が選択した）。この事例論文を提示しつつ、以下のような手順を説いた。

- ① 論文課題の前提を理解する一事例では「天」観念の思想史、金谷師の研究の方向など。
- ② 構成を観察する。問題領域、先行研究の検討、著者の視点等を説く序論部分と、論の成果や思想史的位置、研究展開の可能性等を説く結び部分に注意する。
- ③ 本論の読解。必要なら数回読む。a) 知識不足の場合は用語等を調べる、b) 使用資料は元の文献に戻り確認する、c) 著者の論述に即して論旨を把握することが必要である。一回読むだけでは済まない。
- ④ 論旨の核心（踏み出した一步、問題提起）が何かを把握する。何を言いたいかと各節ごとに問いかけ、その回答として各節の趣旨を短くまとめる。この連なりで論文の構成とその必然性がみえてくる。さらに各節まとめを集積して核心を端的にまとめる。またその核心を踏まえ、論文末尾から構成を遡及して、資料使用様態と構成の必然性を確認する。なお核心を支える資料の提示が論文後半にあるとは限らない。
- ⑤ 出てきた核心を支える視点やアイデア、資料処理法や新資料等を、著者に即してあらためて受けとめる。以上までは著者に即した理解に努める。この過程で違和感を持っても急がず、それは次の⑥で考える。
- ⑥ 論文の問題点を検討する。この「検討」で大事なものは、上記③のb) 資料の読解・使用法の妥当性、及び⑤の視点で④の核心が導かれるか、といったことである。なおこの「検討」は、論文読解者の研究の視点や問題意識とか読解目的等により、見え方が

異なってくる。「検討」は、あげつらうためではなく、当該論文が提起する問題をより大きく且つきちんと捉え直すためにおこなうものである。

以上までが演習実施前の解説に当たる。この解説を踏まえ、演習発表各担当者は、上記③④を「論文構成」、④の核心と⑤⑥を「検討」に分けてA4版2枚に収まるようにまとめ（←難しい）、発表プリントを作成する。以上の準備を踏まえ学部3年次演習では素材論文一本あたり三ないし四回セットで論文解析演習をおこなった。

4. 演習の実施

まず一回目の前週までに素材論文を配布し参加者に一読してもらっておく。学生は、2年次に中国思想史概説を受講しているが論文の問題領域を知悉しているわけではない。そこで一回目は当該論文の問題領域の思想的概説とおよその研究史、素材論文著者の研究の概要を担当教員が紹介する。なお三名の分野教員は全員かならず出席することにしてきた。他教員の説明を共同の場で聞くことはお互い良き勉強になる。四回で実施するときは、二回目に当該論文の中心的資料を配付し講釈、解説する（四回おこなわない時はこれは一回目に入れる）。三、四回目に上記「3」に従って作成したプリントをもとに発表担当者が発表し、出席者間で質疑応答をする。四回目に担当教員が当該論文の上記「2」のABC、および喚起される研究史的問題について解説してまとめる。

大学院演習では担当院生が取り組みたい論文を取り上げ、問題領域の概説等も含め担当者の発表を中心とし、おおむね二週を使い、発表・討論をするようにした。

意を尽くせない点も多いが、大要、以上のような論文の読み方教育を試みてきた。実施して成功しているかと問われるとまことに心許ない。複数回の発表を経験してわかってくるというのが、おおよそのところであったように思う。とはいえ本学会会員であれば、評価の視点とか読むことは書くことに繋がるといった、本小文の意図する処はご理解いただけるのではないかと思う。参考になるところがあれば幸いである。

「第九屆新子學 國際學術研討會議」 參加記

山田 俊

熊本県立大学

2021年10月23日、中国文化大学（台湾）主催・華東師範大学共催により「第九屆新子學國際學術研討會議」が開催された。2019年7月に西北師範大学（蘭州）で第八屆が開催されて以後、新型コロナウイルスの蔓延により二回の延期を余儀なくされた後、両大学を拠点会場とし、会場に参集出来ない者はオンライン参加し、全体をTencentでつなぐ形式でようやく開催に漕ぎつけた。

「新子学」という名称が学会諸氏にどの程度認知されているのか定かではないが、2012年10月22日付けの『光明日報』に方勇氏（華東師範大学）が『「新子学」構想』を発表したのに端を発する。「新子学」には、『「新子」の学』と「新『子学』」の二重の意味があるとし、前者は考察対象を「経史子集」の「子」類から解放することを意味し、後者は研究方法を目錄学に基づく伝統的諸子学から解放することを意味する。今回の個別テーマの一つにも『「新子学」対『漢書・芸文志』諸子觀的重估』が挙げられており、これは『漢書』「芸文志」以来の「因経而有子」「以子而通経」觀に対し、「諸子」の出現に積極的意味を見出し、今日的な新たな学問を確立しようとする方勇氏の視座に基づく。今

回も方勇氏は『「新子学」は學術理念であり、文化的立場である。この理念は伝統的諸子学に新たな局面をもたらすことを意味し、『新』は研究方法の刷新に限られず、子学と新時代とを結び付け、現代におけるニューノーマルを作り上げることを意味する』（「開会式挨拶」）と述べている。ここから、後者には「新子学」に現代性を持たせることを狙い、「中華文化の認識」とも連動させようとしていることが窺える。今回のもう一つの個別テーマに『「新儒学」、『新子学』与中国文化認同』が挙げられているのはそのためである。方勇氏は「中国古典文化の基本構造から着手し、諸子思想全体が果たした働きとその背後にある理論構造と価値を分析し、近代以来の中国文化と西洋文化の遭遇を内在的契機とし、諸子学の内在的生命力とその責務を改めて確認し、将来的な中国と世界の関わりに展望をもたらす」（方勇氏報告）と述べている。

方勇氏個人は『莊子学史』（人民出版社、2008年）、『莊子纂要』（学苑出版社、2012年）などの『莊子』を中心とした文献研究を重ね、『子蔵』編纂の主要人物でもあり、學術論文の場としての『諸子学刊』の創刊者でもある。この文献考証を重視する姿勢が「新子学」の底流をなしている。報告者は「新子学」という視座を特に支持する訳ではないが、既成の枠組みにとらわれず、研究対象を文献研究に基づいて解説していくという視座は殊更退けるべきものではないこと、また、本会議が一貫して「新子学」とは無関係の観点からの報告も許容していること等から、自身の研究と諸子学との関わりを考える機会として本会議に参加し続けている。

本会議は四分科会に分かれ、報告は全てライブ配信で行われた。個々の報告の後に司会者が簡単なコメントを寄せ、概ね五人の報告が終了した時点で簡単な質疑応答がなされた。分科会司会者と報告題目は以下の通りである。

A会場。司会者：董金裕、陳逢源、高柏園（報告者数15名）
方勇「務為治」：「新子学」的學術理念与價值訴求／王
俊彦「隋・蕭吉『五行大義』的氣論」／山田俊「中国近
世思想史的司馬光、『法言』、与『道德經』—以性、質、
学、諸子為核心」／殷善培「“儒門淡薄”与“三教合一”—
子学視域下的儒家困境」／馬世年「諸子学史視野中的新

子学研究—以韓学研究為個案的考察」／許朝陽「夢說『齊物』一章太炎『齊物論』的唯識解莊及對『夢說』的處理」／鄭燦山「唐代道教『坐忘論』的思想史意義—宋朝士大夫的觀點」／曹攻煥「關於栗谷李珣道教認識的研究—以自然災害的認識及克服方案為中心」／高華平「先秦名家對諸子百家的學術批評」／歐明俊「論“子學精神”與“新子學”的啟示意義」／陳錫勇「『老子』非『道德經』弁正」／楊祖漢「道家的無相原則、審美判斷及超越的合目性原則—牟宗三先生對康德審美判斷的批評與重構」／張嶠「論方勇的“新子學”理念—讀『方山子文集』札記」／揣松森「論“新子學”視野下的諸子觀—以『漢志·諸子略』為中心進行探討」／李華「陰陽五行與思孟淵源再探—從『漢書·藝文志』中的“兵陰陽”『孟子』談起」

B 会場。司會者：齊婉先、許端容、鄭燦山（報告者數14名）
陳成吒「“新子學”視域下的『“子藏”學』建構與人文學術反思」／賈學鴻「關於新子學研究視角與方法的思考」／劉思禾「以『墨』解『莊』五例」／賴賢宗「方東美生命哲學的上下雙迴向與易論本體詮釋學的展開」／梁釅「東、西方的修辭間距：論垂里斯多德與鬼谷子的說服者品格」／齊婉先「『荀子』之聖人詮釋對於孔孟聖人觀之承繼與轉向」／鄧國宏「理學傳統下荀子思想學術形象的更新—以桐城派方苞、姚鼐和劉開師徒為中心的考察」／曾暉傑「“民性”非“人性”—韓非的去人性化之政治人敘事系統」／劉潔「“新子學”與中華文化認同」／李銳「『莊子·天下』篇成文時間新探」／許端容「『莊子』物理時空詩學互文書寫」／黃燕強「身觀與心証：『莊子』“忠恕之道”發微」／朴榮雨「從“隱喻投射”概念論『莊子』“卮言”文本的行為邏輯」／孔令宜「『莊子·人間世』安“義”若“命”的化解作用」

C 会場。司會者：賴昇宏、黃智明、陳惠美（報告者數13名）
陳惠美「洪頤煊子部輯本輯佚成果述評」／劉佩德「“新子學”視域下的道家文獻整理與研究」／曾建華「古今學問事，十年“新子學”：從學術構想到文化引領」／姜含琪「近代史學視域下的諸子學研究」／王小虎「作為一種學術思潮的“新子學”如何可能」／賴昇宏「論『白虎通』“性情說”與“禮教觀”」／褚麗娟「晚清傳教士—漢學家對兼愛的英譯研究」／徐翔「聖王執規與秩序的起源—以

黃老學“道生法”的思想為中心」／方達「“諸子學”的整體之思」／黃智明「莫伯驥『五十萬卷樓群書跋文』對『四庫全書總目』之舉正—以子部提要為考察中心」／宋德剛「老莊“自”類語詞的哲學意蘊」／張耀「諸子學：直面危機的“逆行者”—論“新子學”如何延續諸子學在危機應對上的優勢與智慧」／歐夢越「論“新子學”的“新子”之學—以嚴復為例」

D 会場。司會者：許隆演、王國忠（報告者數9名）

王國忠「試析『洞玄靈寶自然九天生神章經』中氣化落實人身之過程」／袁朗「“新子學”視域下從“內容史”到“方法史”的老學史再構」／王沢宇「四論、五論“新子學”的再探討—兼論『“子藏”學』對於『漢』『隋』二志的超越」／莊秀婷「論“新子學”的“辭章之學”研究—以陸遊詩歌對莊子接受為中心」／許隆演「『周易』與儒家“氣論”思想」／章含舟「關懷倫理該如何對話儒家倫理？」／孫広「“孟子升格”之後：論明代『孟子』定位的變遷」／何雪利「以『子藏』為木鐸，開“新子學”之範式」／吳劍修「有秦焚書不及諸子：“百家語”文本性質考論」

報告内容は「新子學」そのものを考察の対象とするもの、「新子學」の立場から諸子に分析を加えるもの、その他、に分けられる。冒頭に述べた様に、「新子學」は方勇氏の理念が先行した視座であるため、体系的方法論が確立しているわけではない。また、「子」を四部から解放した結果、却って「子」の輪郭が曖昧となっている。この点は関係者も自覚しており、それに関する報告も多く見られた。こうした点は「新子學」に今後携わる若手研究者の課題と言えよう。D 会場の報告の多くが新子學そのものを論ずる博士生によって固められていたのは、あるいはその辺りを配慮したものなのかもしれない。

尚、「新子學」に就いては方勇『方山子文集』（学苑出版社、2020年）、『「新子學」論集』第一～三輯（学苑出版社、2014年、2017年、2020年）等を参照されたい。また、賴錫三「新子學與新莊子學」（『思想35 反思進步價值』。台灣聯經出版、2018年）は、大陸の「新子學」と台湾の「新莊子學」を比較し、両者の性格を両地区の「新儒家」にまで遡って分析した好論である。

象数易研究の現状と展望

藤田 衛

私は、2018年に『『易緯』爻辰説の考察』で日本中国学会賞をいただきました。その縁もありまして、専門の研究分野に関する「研究の現状と課題」の執筆の依頼をいただきました。いまだ研究途上では

ありますが、またとない機会ですので書かせていただくことにしました。

私は、これまで緯書、特に『易緯』を中心に研究してきました。『易緯』とは、孔子の作とされる緯書の構成要素の一つで、緯書中における『易』の解釈書に相当します。ただ緯書は、孔子の作などではなく、前漢末ごろに編纂された、いわば偽書です。とはいえ、緯書中の経書解釈は、前漢今文学に依拠しており、前漢での学問の蓄積の上に成り立っています。『易緯』で言えば、京房の易学が基礎となっています。現在は、幅を広げ、漢代易学とりわけ象数易の研究を行っています。そこで、私が行ってきた研究を踏まえ、象数易研究の現状と展望について述べたいと思います。

最初に、易学の流れについて簡単に説明しておきます。『易』の学問がとりわけ発展したのが、前漢・後漢の世で

す。さまざまな学派が生まれ、易学の基礎はこの時代に築られました。漢代では、『易』の理論を敷衍させ、占法および解釈の技法が数多く編み出されました。それを象数易と呼びます。象数易とは、象徴と数理をもって『易』を解釈する方法論のことです。また、森羅万象を『易』と関連付けて説明しようとする試みでもありました。

そして、象数易に対する反発として出てきたのが、いわゆる義理易です。義理易は、一言で言えば、象数への拘泥をやめ、人事にひきつけた経文全体の意義の把握に努めた解釈法です。その大成者が、三国魏の王弼です。その王弼注は、唐において最良の注釈として選定され、『周易正義』が編纂されました。そのことによって、象数易は退潮し、漢代の注釈書は、北宋に至るまでにほとんど散佚しました。しかし象数易は、『易』の解釈法としては衰退しましたが、唐以後でも主に占法の一技法として活用され続けます。

象数易は、易学史上、重要な位置を占め、どの時代の『易』研究をするにしても、その知識は必要不可欠です。しかし、日本での象数易研究は数多くありません。鈴木由次郎『漢易研究』は、およそ五十年前の研究でありながら、現在でも漢代易学の学派・思想・書物を総合的に論じた概説書として読まれ続けています。それは、この本が完璧だったわけではありません。漢代易学研究の低迷を現わしているのです。その原因には、象数易の難解さが大きいでしょう。例えば、坎☵の六四爻辞「樽酒簋贰」に対し、鄭玄は、「六四は上にて九五を承け、又た互体震の上にて在り。爻辰は丑にて在り、丑は上にて斗に値たり、以て樹の象とすべし。斗上に建星有り、建星の形は簋に似たり」と注を付けています。これは、次のように理解できます。坎の六四は、九五を承けており、坎の二爻・三爻・四爻の互体である震☳の上に位置する。その六四は、爻辰説によれば、丑に配当される。丑は、天上においては斗宿の方角に当たり、北斗七星は柄杓に似ているので、酌むことの象徴とみなすことができる。斗宿の上に建星があり、建星の形は簋に似ている。だから、坎の六四爻辞に「樽酒簋贰」とあるのだ、と。象数易は、何をやっているのか訳が分からない、とよく言われます。

ここで互体や爻辰といった見慣れない用語が出てきたと思いますが、象数易特有の用語や解釈法が多く出てくるのがその一因でしょう。漢代に編み出された象数易的技法は、十数種類にも及びます。

象数易研究の第一歩として、まず以上のような象数易的技法を把握しておかなくてはなりません。しかし、日本には象数易を解説した書物が乏しいのが現状です。『漢易研究』は、絶版となっており、古本でも高値がつき、簡単に手に入れることはできません。取っ掛かりとなる入門書の不足が、象数易研究の参入障壁となっていると思っています。象数易研究の発展のためには、漢代易学研究の刷新、象数易的技法の解説書の作成が求められています。私は、現在、そうした問題意識を持ち、研究を進めています。

近年、最も進展した象数易の領域は、『易緯』だと言えます。『易緯』は、先に述べたように、前漢末以降に編纂された緯書的一篇で、京房の易学の流れにあります。京房は、前漢での象数易を発展させた重要人物です。ですから、『易緯』も象数易の範疇に入ります。

実は、日本には『易緯』に関する優れた論考が多数あります。久野昇一「易緯に見えたる軌に就いて」は、『易緯』の世軌説を解説した先駆的な論考です。1947年に発表された論文ながら、今なお日中で参照される第一級の研究です。緯書研究と言えば、安居香山・中村璋八両氏を忘れてはなりません。両名は、緯書の佚文の輯佚につとめ、『重修緯書集成』を完成させました。この書は、日本のみならず、中国でも、緯書研究では必ず参照されます。両名の研究は、特に『易緯』の文献面において進展させました。思想面の研究では、武田時昌氏（『術数学の思考——交叉する科学と占術』など）や辛賢氏（『易緯における世軌と『京氏易伝』』）の研究を挙げることができます。それは、『易緯』と京房の継承関係を証するものでした。

そして、私の一連の『易緯』研究があります。その研究は、思想面と文献面に分けられます。思想面では、『易緯』に記される易術の構造を解明しました。『易緯』爻辰説の考察は、その一つです。その他にも、暦日と卦を結合させ災異を占候する卦気説、王朝交替の周期を表

す世軌説、将来起こりうる災祥を占候する「推厄所遭法」、帝王の即位期間を占う「推帝王即位法」の仕組みについて分析しました。

文献面では、現行本『易緯』の真偽問題で新たな知見を得ました。現行本は、『四庫全書』に収録される本で、八種で構成され、注は鄭玄注とされています。しかし、仮託が含まれていることは早くから指摘されていました。そこで、現行本のどれが偽書で、どこが鄭玄注ではないのか弁別を行いました。その中で、大きな発見をしました。日本に伝わる『周易命期略秘伝』と『易緯稽覽図』巻下の内容が、多く一致することを見いだしたので、『周易命期略秘伝』は、日本にのみ伝わる書物で、唐の李淳風や釈氏英の著作とされる『周易命期経』を基礎として、日本人がその易術の要点をまとめた本です。『易緯稽覽図』巻下は、もとは『易緯』の一篇ではなく、唐ごろに編纂された『易緯』に由来する易術を解説した書物だったと考えられます。これは、単なる偶然ではなく、『周易命期略秘伝』と『易緯稽覽図』巻下は起源を同じくしていると推定されます。『周易命期略秘伝』と『易緯稽覽図』巻下は互いに補完し合う関係にあり、より正確な易術の理解が可能となったのです。

『周易命期略秘伝』の価値は、それだけではありません。『周易命期略秘伝』には、日本での運用例が記されていました。例えば、三善清行や賀茂光榮らが卦気説で災異を占候した例や、「推厄所遭法」を使って仁和三年（887年）に起こる出来事を占った例、寿命を占う易術で白河天皇の寿命を占った例などが記録されています。こうした易術の実例は、中国より日本の方が多く残っているほどです。日本人は、平安時代にはすでに象数易に対し深い知識を有し、そして運用していた事実が判明したのです。現在、日本には『周易命期略秘伝』に関連する書物が、多数、残されています。しかし、ほとんど手が付けられていない状態です。『周易命期略秘伝』を中心にして、日本の象数易の受容について研究を進めていく必要があります。

象数易研究は、もはや中国のみを対象とするものではありません。象数易の東漸、日本を射程に入れた研究が、今後、大きな進展を見せることが期待されるのです。

国内学会消息 (令和3年)

●北海道大学中国哲学會

例会 2月26日

- ・卒業論文成果発表會 長谷川健太
- ・修士論文成果発表會 何 松延

4月30日

- ・陶淵明の「雜詩」其の十二について 熊 征

5月28日

- ・『莊子』に類出する「蕪」字について 和田 敬典

6月25日

- ・『史記』天官書をめぐって 莫 寒

7月30日

- ・王符『潜夫論』志氏姓篇の意義について 市村俊太郎

9月24日

- ・研究・教育・生活座談會 金原 泰介

10月29日

- ・卒業論文構想発表會 水野 大我

11月26日

- ・「魏書」倭人條の狗奴国王名は「卑彌弓呼素」—PCの検索機能を活用した漢文讀解の一例— 木村 清順

第51回大會 8月28日 オンライン開催

- ・包山卜筮祭禱簡における天神・地祇・人鬼について 趙 珊
 - ・後漢三賢について 凌 玲
 - ・屈原の精神～屈原の自殺に對する歴史上の評價 姜 夢軒
 - ・陶淵明の「新自然説」について 熊 征
 - ・人の死に関する張載の見解 山際 明利
- (路 勝楠・熊 征 記)

●北海道大学中国語・中国文学談話會

第263回 2月20日

- ・パンダを考える—1970年代のパンダが背負うもの 阿部 初音

第264回 4月30日

- ・1950年代における臺灣の乞丐—反共宣傳と圖書館設立に人生を捧げた王貫英を中心に 池田 真衣
- ・盤瓠神話に関する考察
- そこに見える漢代の歴史痕跡を中心に 呉 秀娟

・1950年代中国における「反細菌戦」表象 趙 海涵

第265回 7月3日

- ・『金瓶梅』における「香り」の描写と人物像 張 江林
- 刊行物
- 『火輪』第42號 (3月)
 - 『饕餮』第29號 (9月)
 - 『連環畫研究』第10號 (11月)

(藤井 得弘 記)

●秋田中国学会

秋季第171回例会 11月27日 於秋田大学教育文化学部

- ・梅娘の日本滞在期と外国文学紹介 羽田 朝子
- (羽田 朝子 記)

●東北中国学会

第69回大會 5月29日

オンライン開催 (中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

- ・班固の「明哲保身」の処世観について 南部 英彦
- ・『養生要集』の構成と医学思想 浦山 きか
- ・蘇軾の西湖詩について 室 貴明
- ・王陽明の南京時代における學術論争
- 王道との議論を中心に— 費 康幸

・中国漫画言説の系譜

城山 拓也
(齋藤 智寛 記)

●東北シナ学会 (中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

二月例会 2月19日

[卒業論文発表会]

・雍正帝の理想的君主像 新井 太治

[修士論文発表会]

・崑崙刺殺旦の代表的演目「三刺」と「三殺」について
の研究 王 宇峰

・王陽明の思想について—南京時代の活動を中心に
費 康幸
(高橋 亨・菅原 尚樹 記)

●東北大学中国哲学読書会

第204回 10月1日

[研究発表会]

・中国中世における李氏と劉氏の反乱について 劉 帥池

第205回 11月23日

[卒業論文構想発表会]

・魏晋南北朝における李氏と劉氏の反乱と凶讖 劉 帥池

[修士論文構想発表会]

・『論語義疏』における皇侃の性情論 余 中原
・明末の科挙と四書学 丁 欽馨

第206回 11月20日

[研究発表会]

・『論語義疏』における皇侃の性情論 余 中原

第207回 12月24日

[研究発表会]

・明代正徳から嘉靖初年の内閣大学士の職掌について
高橋 亨
・李光地と『御纂朱子全書』の編纂事業について
尾崎順一郎
(高橋 亨 記)

●東北大学中国文学研究会

7月13日

[卒業論文構想発表会]

・李清照詞にみる夫・趙明誠との関係性について
横山 桃子

10月30日

[卒業論文中間発表会]

・李清照研究 横山 桃子
(菅原 尚樹 記)

●中国文化学会

大会 8月28日 オンライン開催

・章学誠の「通」について 渡邊 大
・近代日本における中国人女子留学生の一考察
—雑誌『女学世界』を中心に— 楊 妍
・庾信「哀江南賦」試論—語り手の問題— 樋口 泰裕
・杜甫の詩の「汝曹」について 大橋 賢一

例会 6月19日 オンライン開催

・ボストン美術館蔵呉昌碩「与古為徒」扁額真跡の出現
をめぐる 松村 茂樹

刊行物

『中国文化—研究と教育—』第79号 (6月)
(内山 直樹 記)

●お茶の水女子大学中国文学会

大会 4月17日 オンライン開催

・海子から余秀華へ—私的詩論 宮尾 正樹

7月例会 7月3日 オンライン開催

・『川文粹』について 富 嘉吟
・曹植の游仙詩について 趙 美子

12月例会 12月4日 オンライン開催

・周興嗣研究 泰田利栄子
・非量詞用法の“个”と“一”の共起に関する一考察
～“个+NP”形式を中心に～ 王 芸嫻

・魔術的リアリズムから異なる道へ

一閻連科の「神実主義」

李 夢雨

(竹野 洋子 記)

●六朝学術学会

第25回大会 9月25日

オンライン開催（青山学院大学・國學院大學）

・曹操政権における軍師と軍師祭酒

一魏科との関わりから一

青木 竜一

佐野 誠子

・庾信の碑文と『弘仁本文館詞林』所収「郢州都督蕭子昭碑銘」について

陳 錦清

福田 素子

・郭象の思想における王弼の位置

伊藤 涼

・道宣の感通と「東夏」意識の変遷

齋藤 智寛

・「黄龍国」小考

小野 響

[講演]

・『搜神後記』「武昌山毛人」の毛人とその後裔たち

福田 素子

・機と時—道宣『集神州三宝感通録』およびその感通論について

劉 苑如

・六朝の詩風と詩語の継承

一陶淵明、謝靈運から鮑照、謝朓へ一

佐藤 正光

刊行物

『中唐文学会報』第28号（10月）

(洲脇 武志 記)

第42回研究例会

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

刊行物

『六朝学術学会報』第22集（3月）

(山崎 藍 記)

●日本宋代文学学会

第八回大会 11月27日 オンライン開催

・「後死」について—白居易・陸游を中心に— 藍 莫雅

・宋代哲学と琴学—『漁樵問対』と琴曲「漁樵問答」

早川 太基

●日本杜甫学会

第5回大会 9月4日 オンライン開催

・杜甫韻字ユニットの継承とその影響について 水谷 誠

・杜甫詩における閨情表現 下定 雅弘

[講演]

・《秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻》

一兼論其創作過程與寫作特點—

吳 懷東

第六回唐宋八大家シンポジウム

JSPS 科研費「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」共催

・近世日本における蘇轍「上枢密韓太尉書」受容

一室鳩巢と頼山陽を中心に

山本 嘉孝

・北宋太守の文学—蘇軾の密・徐知州時代における文と詩詞

内山 精也

・唐宋八大家古文の計量分析的考察

一序・記・論の虚詞分析 東 英寿・久保山哲二

『杜甫研究年報』第4号（3月）

(紺野 達也 記)

刊行物

『日本宋代文学学会報』第八集

(奥野新太郎 記)

●日本聞一多学会

第24回大会 10月30日 於二松学舎大学

・魯迅と韓愈—それぞれの詩人像および秋の詩篇について— 鄧 捷

・中国近代学術の多面性—詩経研究をめぐって— 牧角 悦子
(横打 理奈 記)

●日本漢詩文学会

第15回例会 3月6日 於湯島聖堂講堂

<https://nihonkanshibun.jimdofree.com/>

・オープニング演奏(弦楽アンサンブル) モーツァルト
セレナード「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」
～第一・第四楽章 アンサンブル凛

・陶晶孫『淡水河心中』研究—新聞報道との違い 武部 水音

・『南史』羊侃伝と『楽府詩集』に見る「紫驢馬」のイメージ ガイ ホップス

・廢墟について—中国とギリシャの比較 上野 慎也

刊行物

・『日本漢詩文学会会報』第9号(9月)

(松野 敏之 記)

●日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

9月4日、5日 オンライン開催

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

『唐宋名家詞選』譯注検討會

3月13日～15日 オンライン開催

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

小風絮會 1月23日、6月27日、7月24日、8月21日、
10月16日、12月11日 オンライン開催

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討
刊行物

『風絮』第18號(12月)

(藤原 祐子 記)

●國學院大學中國學會

第220回例会 1月9日 オンライン開催

・『莊子』にみえる「歌」に関する一考察
—「楚辭」との関連を手掛かりに 中山ひかり
・1955年「旅欧日記」から見る謝冰心の社会的地位
牧野 格子

第221回例会 10月23日 オンライン開催

・『史通』疑古篇小考 名越 健人
・楚辭「離騷」「俗」義小考 木村 剛大

第64回大会・総会 10月24日 オンライン開催

[公開講演]

・唐代小説の中の詩歌 澤崎 久和
[研究発表]

・劉向『別録』と『漢書』古今人表 長谷川清貴

・成公綏の賦について 鈴木 崇義

・日中小さ子譚の比較研究 立石 展大

・「ポイントン日記」における日中戦争初期に関する記述
について 牧野 格子

研究会

・唐代文学研究会(毎週火曜日、オンライン)
—『宣室志』を読む— 澤崎 久和

・宋代文学研究会(毎週火曜日、オンライン)
—『宋史』・『宋元學案』の読解— 石本 道明

・中国哲学史研究会(毎週木曜日、対面)
—『宋元學案』晦翁學案の読解— 青木 洋司

・中国現代文学研究会(毎週火曜日、対面・オンライン
併用)—謝冰心「再寄小讀者」精読— 牧野 格子

・中国礼俗文化研究会(毎週金曜日、オンライン)
—『太上除三尸九蟲保生經』会読— 浅野 春二

研究会成果報告（活動報告） 10月23日

第221回例会終了後 オンライン開催

奨励賞表彰 3月21日

[卒業論文]

・蘇詩詠物の特質—「竹」「梅」を端緒として 青木 仁美

刊行物

『國學院中國學會報』第66輯

『崑崙』第229号～第231号

(青木 洋司 記)

●早稲田大学東洋哲学会

第38回大会 6月12日 オンライン開催

・『大日経疏』における戒の異称について 山尾 宥勝

(伴 俊典 記)

・天観念から見る李贄童心説と羅汝芳の赤子の心の比較

及川 伶央

・弥勒・弥陀信仰よりみる法華懺法の実修と次第の確立

矢島 礼迪

・『阿毘達磨大毘婆沙論』における有漏法と無漏法:説一切有部の仏身有漏説から抽出されるその発展のモデル

藤本 庸裕

・程顥、程頤の「理」、「性」、「命」の思想

—王安石の「性命之理」との対立から— 田村有見恵

[講演]

・龍樹における存在と言語

桂 紹隆

刊行物

『東洋の思想と宗教』第38号（3月）

(崔 鵬偉 記)

●早稲田大学中国文学会

第46回春季大会 6月26日 オンライン開催

・成績分析から見るオンラインテストの特徴について

楊 甯

・蘇童『香椿樹』系列における物語の構築

—対位法とポリフォニー—

孔 繁漪

・『録鬼簿』における散曲・雑劇作家著録考

—戯曲史的位置づけからの再検討—

李 家橋

[講演会]

・唐話辞書と中国戯曲

岡崎 由美

第46回秋季大会 11月27日 オンライン開催

・明代才子佳人劇における夢の演劇的表現 陶 雋卿

・三宝の舞台に見る「ミュージカル」形態の模索

張 敏行

・中国近世字書の「臭部」と漏収字について

高山 亮太

[講演会]

・二つの李白詩英譯に見える森槐南の影

長谷部 剛

刊行物

『中国文学研究』第47期（12月）

●慶應義塾中国文学会

第6回大会 7月10日 オンライン開催

・昌平坂学問所の蔵書形成に関する一考察—「賜書」と「献納本」を中心に—

カパツソ ダニーロ

・感傷詩の「感傷」—『白氏長慶集』の四分類をめぐる—

山田 尚子

・『呂氏春秋』における「有司」と「吏」の用法

北川 直子

・宮内庁書陵部蔵『上代様草書手本』の資料的価値について

李 篠硯

[講演]

・溺女と間引き—嬰兒殺し対策の日中比較論—

山本 英史 (関根 謙 記)

●名古屋大学中国哲学研究会

刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第19・20合併号（5月）

●京都大学中国文学会

第36回例会 7月10日 オンライン開催

- ・新世界における「旧詩人」の躍進
—『吳宓詩集』を切り口として 黄 詩琦
- ・「王孟」再考 二宮美那子
- ・汪精衛の詩と詩論をめぐって 平田 昌司

刊行物

『中国文学報』第94冊（4月）

（緑川 英樹 記）

●中國藝文研究會

合評會・研究会 4月25日 オンライン開催

- ・敦煌文獻「佛圖澄和尚因縁記」の基礎研究 高井 龍
- ・『中州集』の刊行及び日本における元遺山の受容 斬 春雨
- ・詞牌「迎仙客」について 萩原 正樹

研究会 8月29日 オンライン開催

- ・プロットなどの組み合わせによる唐代傳奇小説の書き方—「靈應傳」を例として 唐 鈺
- ・蘇轍の仕官・隠棲に對する考え方について
—元祐時期以降 鄭 玲玉
- ・江戸時代後期女流文人の社交について
—高橋玉蕉を中心に 詹 斐雯
- ・明治文壇における高青邱詩の受容
—長三洲と近藤元粹の次韻詩を中心に 斬 春雨

合評會・研究会 11月13日 於立命館大学・オンライン開催

- ・白話小説を構成するもの～地理情報が語るもの～
廣澤 裕介

刊行物

『學林』第72號（6月）

中村喬『譯注『食憲鴻祕』—明代の食譜』（7月）

『學林』第73號（12月）

（萩原 正樹 記）

●大阪大学中国学会

刊行物

『中国研究集刊』第67号〔菜号〕（8月）

電子版 <https://www.chugoku-kenkyu-shukan.org/>

（湯浅 邦弘 記）

●懷徳堂研究会

<https://www.kaitokudo-kenkyukai.org/>

第30回研究会 3月20日 オンライン開催

- ・西村天囚関係資料の調査と研究—種子島における新資料の発見を中心に— 竹田 健二
- ・遠隔授業“疲れ”の振り返りと今後の対策 清水 洋子

第31回研究会 10月24日 オンライン開催

- ・西村天囚の懷徳堂研究と『拙古先生筆記』竹田 健二
〔講演〕

・無鬼の歴史とその系譜—懷徳堂史学を中心に—

宮川 康子

第32回研究会 12月12日(対面・オンラインハイブリッド開催)

- ・西村天囚と清末民初の中国との接点について
—戊戌維新から新文化運動まで 陶 徳民
- ・種子島に残る天囚の遺墨 湯浅 邦弘
- ・「西村天囚関係新資料」について 竹田 健二
（竹田 健二 記）

●中国出土文献研究会

<http://www.shutudo.org/>

研究会合 3月26日 オンライン開催

- ・北大秦簡『教女』からみる中国古代の女性観 草野 友子
- ・清華簡『四時』釈読 竹田 健二
- ・戦国竹書の用字・書法と書写者
—清華（捌）『邦家之政』を例として— 福田 哲之
（湯浅 邦弘 記）

●広島大学中国思想文化学研究室研究会

第211回研究会 2月12日

[卒業論文発表会]

- ・『戦国策』研究 高井 未来

第212回研究会 11月1日

[卒業論文中間発表会]

- ・古代中国の説明神話について 石松 紗英
- ・自由民権運動に及ぼす雲井龍雄の作用について 遠藤 瑞希
- ・『搜神記』と『漢書』五行志から見る古い師像 白井 祥樹
- ・「神」と「性」との関係
—『抱朴子』外篇と『論衡』を中心に— 千鶴 恵史
- ・荻生徂徠の葬祭礼観 福原 凜
- ・吉田松陰の獄中教育について
—野山獄同囚との交流を中心に— 毛利 彩香
- ・辛亥以降の章炳麟の政治行動 吉川 悠介

第213回研究会 12月14日

[卒業論文テーマ発表会]

- ・唐・宋における女仙麻姑の民間信仰—文学の観点から— 榎本 恵
- ・塩鉄論について 大賀 史也
- ・古代中国における、薬の素材と効能について 清水 堅登
- ・現代から見た荀子の思想 高森 海貴
- ・易の揲筮法について 正岡 和真
- ・太公望に見る「神仙化」現象 森本 聖洋

刊行物（発行人 東洋古典学研究会）

『東洋古典学研究』第51集（5月）・第52集（10月）

（有馬 卓也 記）

●広島大学中国文学研究室研究会

第225回 2月5日

[卒業論文最終発表]

- ・『太平広記』再生説話の研究 —他部所収の再生説話の特徴及びその比較— 森島 豊大

- ・『太平広記』の変身譚—罰を受けて変身する話について— 池田 詩貴

- ・『笑府』における揶揄について 門脇 響
- ・『十八史略』の出題傾向について 東田 彩音
- ・竹内好『故事新編』訳の検討—改訳後および木村英雄・高橋和巳訳と比較して— 濱田 菜月

第226回 6月24日

[修士論文構想発表]

- ・魯迅の翻訳作品における「創作」について
—ジュール・ヴェルヌ作品を中心に— 劉 宗源
- [修士論文中間発表]
- ・「平復帖」の書者をめぐって 楊 春雨
- ・『金瓶梅』における一人称代名詞の研究
—「俺每」「俺們」を中心に— 朱 未
- ・『情史』長卿氏評と『奇女子伝』の評語について 高 玥峰

第227回 7月29日

[卒業論文構想発表]

- ・『水滸伝』の代名詞的人物について 濱本 利音
- ・岡島冠山『唐話纂要』研究 —その経歴と著作について— 桑原あずみ
- ・近代日本の中国語学習に関する研究
—『華語跬歩』を中心として— 小田 直弥
- ・魯迅『故事新編』における食材のメタファーの研究 高尾 俊輝

第228回 11月25日

[卒業論文中間発表]

- ・『李卓吾先生批評三国志』における人物の評価軸について 西岡 大気
- ・諸葛亮の人物像
—『三国志』と『三国志演義』を中心に— 濱本 利音
- ・岡島冠山著『唐話纂要』研究 —序文跋文について— 桑原あずみ
- ・『華語跬歩』とその改訂 小田 直弥
- ・「奔月」における食べ物の特異性とメタファー 高尾 俊輝

第229回 12月23日

[修士論文構想発表]

- ・『聊齋志異』における「異史氏曰」の評語について
黄 舒銘

[修士論文中間発表]

- ・『金瓶梅』における一人称代名詞の研究
—「奴」「奴家」を中心に— 朱 未
- ・『情史類略』における文末評語の「痴」について
—巻七「情痴類」を中心に— 高 玥峰
- ・魯迅の翻訳作品における「尚武」の精神とその表出
—ジュール・ヴェルヌ作品を中心に— 劉 宗源

刊行物

『中国学研究論集』第39号（4月）

（川島 優子 記）

●中国中世文学会

令和三年度研究大会 10月30日 オンライン開催

- ・『文選』のなかの王粲 畑村 学
- ・梅堯臣詩における家族描写の成熟 大井 さき
- ・余達父と明治漢詩結社との関わりについて 日 扯拉

刊行物

『中国中世文学研究』第74号（3月）

（川島 優子 記）

●山口中国学会

例会 7月10日 於山口大学人文学部

- ・「弱者」の叫び—禁忌からみる女性と恐怖との繋がり
90年代の中国ホラー映画における赤衣悪霊をめぐる
考察 于 嘯

大会 12月18日 於山口大学人文学部

- ・中国におけるレズビアンの変遷について
張 倩
- ・王夫之『周易外傳』における性・情・才について
齊藤 禎
（根ヶ山 徹 記）

●中国四国地区中国学会

第66回大会 6月12日 オンライン開催

[発表]

- ・魚玄機の詩に見られる「月色沈沈」 王 若冲
- ・日本の『臨濟録』刊本について 刑 東風

[講演]

- ・中国古代史の魅力—西周王朝の滅亡にまつわる伝承
水野 卓
（太田 亨 記）

●九州中国学会

第69回大会 5月15日 オンライン開催

- ・『磨光韻鏡』の唐音と明清時代の呉方音 平田 直子
- ・[経験]の意味を表す“过”の作用域について 青木 萌
- ・文学テキストの空所を読む—中国語上級クラスにおける
小説読解実践からの一考察— 単 艾婷
- ・コロナ禍での中国語発音教育
—発音中心からリスニング中心へ— 劉 轟
- ・牟宗三の宋明思想理解—「理」の解釈をめぐる
藤井 倫明
- ・文之玄昌自筆本『南浦棹歌』について 上ノ原怜那
- ・張淵「観象賦」創作が持つ文学史的意義について
栗山 雅央
- ・江恂に寄せた詩文からみる蔣士銓の文学制作—「江蔗畦
明府以琴魚琴箏寄餉各報以詩」を通して— 王 毓雯
- ・奥野信太郎の処女作『随筆北京』とその特徴
王 新民

刊行物

『九州中国学会報』第59巻（5月）

（藤井 倫明 記）

●九州大学中国文学会

第312回中国文藝座談会 3月6日 オンライン開催

- ・長屋王のうたげとその詩 久富 茉奈
- ・青年時代の菅原道真 吉野 桜
- ・『三国志演義』における張遼像 尾家 季央
- ・明の統治体制に関わる考察 岡部 和哉
- ・試論法藏三份《文選》寫卷的綴合與断代 景 浩

第313回中国文藝座談会 5月22日 オンライン開催

- ・白居易「遊悟真寺」詩の受容から見る清代中期詩壇の
一側面—趙翼・翁方綱を中心に 汪 洋
- ・三言二拍に見える武人 井口 千雪

第314回中国文藝座談会 7月24日 オンライン開催

- ・趙翼の生涯と白居易 汪 洋
- ・単士釐の出逢った日仏の女性たち 稲森 雅子
- ・唐詩の微韻について 静永 健

第315回中国文藝座談会 9月25日 オンライン開催

- ・空海の碑文における中国の宇宙観・地理観の受容につ
いて ウィリアム マツダ
- ・唐汝詢とその『唐詩解』 陳 禕璇
- ・村瀬栲亭と『垂糸海棠詩纂』 甲斐 雄一

第316回中国文藝座談会 11月27日 オンライン開催

- ・天理図書館所蔵の『西廂記』孤本について 黄 冬柏
- ・目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』—中間報告
稲森 雅子

刊行物

『中国文学論集』第50号（12月）

（岩崎華奈子 記）

◆下記の学会は残念ながら活動を一時休止されました。

- 筑波中国学会
- 東山之會
- 阪神中哲談話会

一日も早い復旧をお祈りします。



各種委員会報告

【論文審査委員会】

委員長 渡邊 義浩

○学会報第74集応募論文の審査の経緯

2022年1月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全21篇（哲学・思想部門6篇、文学・語学部門10篇、日本漢学部門5篇）であった。1月29日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員（論文審査委員会委員1名を含む）を決めた。

3月20日オンライン開催の論文審査委員会、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門4篇、文学・語学部門5篇、日本漢学部門3篇の計12篇を掲載する方向性を定めた。今回、枚数超過や形式不備と認められた論文は皆無であった。来年以降も引き続き、「執筆要領」の遵守にご注意いただければ幸いである。

○その他、3月20日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第75集依頼論文執筆候補者（評議員2名、一般会員2名）を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・文学・語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。

【出版委員会】

委員長 静永 健

2022年度の当委員会のメンバーは以下の通りです。よろしくお願ひ致します。

◎静永 健（委員長・21年学界展望文学を担当）

○宇佐美文理（副委員長・学会便り編集を担当）

甲斐 雄一（学会報編集を担当）

吾妻 重二（21-22年学界展望哲学を担当）

小川 恒男（22-23年学界展望文学を担当）

秋谷 裕幸（21-22年学界展望語学を担当）

◆池田 恭哉（幹事）

【選挙管理委員会】

委員長 松原 朗

メールアドレスの登録をお願いします。本年度は、評議員選挙ならびに理事長選挙があります。前回の「便り」でご報告したように、これらの選挙は「電子投票」で行われ、株式会社グラントが提供する「e投票（クラウド版）」を利用することが予定されています。電子投票の基礎となるのは会員のメールアドレスであり、選挙の御連絡に利用するのみならず、投票においては本人確認に不可欠のIDとなります。まだ登録を済まされていない会員には、早急の登録をお願いできれば幸いです。

ここ数年、電子投票に移行する学会が目立つようになり、とりわけ新型コロナウイルス蔓延以来、その傾向が顕著です。本学会が電子投票導入の議論を加速させた直接の理由も、コロナ禍の中で、選挙の実施に万全を期することにありました。

一方、電子投票への移行にはもう一つの大事な目的があることもご理解ください。わが国の人文系学問領域の多くの学会が、会員数の漸減に象徴されるような大きな試練の中にあり、とりわけ伝統中国の研究を主要な領域に含む本学会においてその傾向が深刻であることは、会員各位にはおそらくご存じのことです。原因は複合的で、且つある意味では文明史的な背景もあって、この趨勢を一挙に覆す名案を探すことは容易ではありません。ただその中には、私たちの手で解決できる課題もあります。それは会員各位が本学会運営に関心を持つことであり、つまり、本学会に多くを期待することです。手始めは、評議員選挙に関心を持つことです。評議員会は、発議し議論し決定する機関であり、交わされる議論は一人ひとりの評議員が持ち寄る至って具体的な課題であり、その多くは会員から出された意見です。

電子投票の導入が、投票率の向上に繋がることは、他のいくつかの学会で確認されており、本学会でも、その

良き効果を期待できるはずです。電子投票が円滑に実施できるよう、よろしくメールアドレスの登録をお願い致します。

なお、最初の電子投票となる今年度は6月4日～6月28日に評議員選挙を行います。メールを使われない方は5月1日から6月14日の間に学会事務局に連絡していただければ、投票用紙を送ります。

【将来計画特別委員会】

委員長 弼 和順

○2021年度大会アンケート結果報告

2021年10月9日・10日開催の第73回大会に関して、同月半ばから翌2月末日まで、本学会ホームページにて、「2021年度大会アンケート」を行った。回答数は118名に及び、昨年度（48名）より大幅に増加した。

全回答のうち、大会参加者は74名、不参加者は44名。不参加の理由は、多い順に「参加の予定であったが、事前申込を失念した」が20名、「当初から不参加の予定」が17名、「参加を試みたがアクセスできなかった」が4名であった。

詳細については、本学会ホームページに掲載することとし、ここでは、その概略について報告する。

■研究発表の実施方法（Zoomによるリアルタイム方式）について

「よかった」が41名（55.4%）と最も多く、「大変よかった」が18名（24.3%）、「いずれともいえない」が10名（13.5%）と続いた。

自由記述では、「対面式の学会の雰囲気に近かった」「発表も質疑応答も臨場感があった」「リアルタイムで発表を聞いた点はよかった」「移動時間や経費がかからずありがたい」など、肯定的な回答が多かった。一方で「一部、通信トラブルがあった」「発表者・司会者のネットが不安定になった場合の対応について改善の余地がある」という指摘があった。

■研究発表の時間（20分間）について

「適当である」という回答が70名（94.6%）に達した。

■質疑応答の時間（10分間）について

「適当である」が57名（78.1%）であったが、「短すぎる」も15名（20.5%）あった。

■司会のコメント及び質疑応答の方法について

「よかった」が36名（48.6%）と最も多く、「大変よかった」が20名（27.0%）、「いずれともいえない」が15名（20.3%）と続いた。

全体として好評であったといえるが、「もう少し質疑応答を延長してもよい」「質問の数を制限した方がよい」「チャット欄に質問の書き込みを認めると、もっと活発な議論ができた」という意見があった。また司会担当者から「参加者の顔が見えない形で司会をするのは正直難しい」という回答もあった。

■発表と発表の間の休憩時間（10分間）について

「適当である」が61名（82.4%）と最も多く、「長すぎる」が10名（13.5%）、「短すぎる」が3名（4.1%）であった。

■今後の大会の方式（リアルタイム方式・オンデマンド方式）について

「リアルタイム方式」希望が42名（59.2%）、「オンデマンド方式」希望が6名（8.5%）、「いずれともいえない」が23名（32.4%）であった。昨年度は「オンデマンド方式」の希望が多かったが、今年度は逆に「リアルタイム」希望が圧倒的に多かった。

「リアルタイム方式」を支持する意見としては「臨場感を伴う意見交換ができる」「一瞬だが、発表者や司会者の姿や表情が映るので、学会らしさが出る」「報告者に対して負担が少ない」などがあった。一方、「オンデマンド」希望の意見としては「技術トラブルが少ない」「時間に縛られずに視聴できる」などがあった。また、両方の方式を折衷する意見として「質疑応答はリアルタイムの方が

よいが、発表はオンデマンドでかまわない」「リアルタイムで行った討論を録画して、一定期間閲覧できるようにする」などがあった。

■次世代シンポジウムの実施形態について

自由記述では「オンライン開催に伴う制約を除けば、進行方法や内容はよかった」「従来の発表は確保しつつ、チャレンジしてほしい」「継続されることに期待する」のように、一定の評価が得られたが、「パネル全員が会員であるのは企画を立てるのにハードルが高い。歴史や美術の研究者をまじえた企画を希望する」「無理やりの実施はそろそろ限界ではないか」という意見もあった。

■総会について

「よかった」が14名(42.4%)と最も多く、「大変よかった」が10名(30.4%)、「いずれともいえない」が9名(27.3%)と続いた。自由記述に「オンラインの場合、総会にも参加しやすい」という回答があった。

■大会参加に関わる連絡のしかたについて

「いずれともいえない」が34名(30.9%)と最も多く、「大変よかった」が28名(25.5%)、「よかった」が22名(20.0%)と続いた。しかし、「よくなかった」が15名(13.6%)、「あまりよくなかった」が11名(10.0%)という回答も一定数あった。

■その他、第73回大会に関して

自由記述に「大会開催校の皆様へ感謝申し上げます」のように、開催校への謝辞が多数寄せられた。その中で「事前申込み、Zoomへの参加、資料のダウンロードそれぞれにパスワードが必要など、学会参加の手続きが煩雑である」「周囲に申込みを忘れて参加できなかった会員が多かった」「オンラインのメリットを活かして多くの会員に参加の機会を提供していただきたい」という意見が見られた。

【研究推進・国際交流委員会】

委員長 三浦 秀一

若手会員の研究推進を目的として、下記要項のとおりパネル型の書評シンポジウムを開催します。本シンポジウムは、今秋開催の学会第74回大会における「学会企画」とします。専門領域・所属機関・性別などについて、参加各位の多様性を考慮したパネルを歓迎します。

◎書評シンポジウム募集要項

1. 学会企画：書評シンポジウム（著者1名、評者3名程度、司会者1名によるパネル型書評会）
2. 時間：報告と質疑応答をあわせて60分以内。
3. 締切：「研究発表の募集」（「学会便り」本号裏表紙所掲）の「3. 締切」と同じ。
4. 応募方法：パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属研究機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、書評の対象とする学術書のタイトルを、「研究発表の募集」の「4. 応募方法」と同様の方法により、大会準備会宛て送付してください。
5. 応募資格：著者と司会者、および評者2名は本学会の会員資格を有していることを条件とします。書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、2018年～2020年に刊行されたもの。評者の年齢は、原則として、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下とします。
6. 応募宛先：「研究発表の募集」の「6. 応募宛先」と同じ。
7. 問い合わせ先：学会事務局（info@nippon-chugokugakkai.org）

事務局より

◎評議員の一部交代について

2022年3月31日に評議員2名が評議員定年を迎えたため、下記のように2020年に実施された評議員選挙の結果に基づき2名の会員が繰り上げ当選となりました（任期は2022年4月1日から2023年3月31日まで）。

- 退任の評議員 市來津由彦会員・加藤敏会員
- 後任の評議員 河野貴美子会員・南澤良彦会員

◎監事の一部交代について

2022年3月31日に監事1名が評議員定年を迎えたため、下記のように2020年に実施された監事選挙の結果に基づき1名の会員が繰り上げ当選となりました（任期は2022年4月1日から2023年3月31日まで）。

- 退任の監事 市來津由彦会員
- 後任の監事 佐藤正光会員

◎出版委員会委員の退任と追加について

渡邊義浩会員、齋藤希史会員が2022年3月31日付で出版委員会を退任することとなりました。また、小川恒男会員を同年4月1日付で同委員会委員に委嘱することとなりました（任期は2022年4月1日から2025年3月31日まで）。

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関等の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄でも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。なお、会員名簿の住所に勤務先の所番地を記される場合、大学・学部名等までご記入ください。郵便物が届かない場合があります。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

◎寄付金について

加地伸行会員（本会顧問）より学会に対し、金300万円の寄付を頂戴しました。ここに広く会員の皆さまにお知らせするとともに、加地会員に改めてお礼申し上げます。

評議員選挙について

本年5月から6月にかけて本会評議員選挙が行われます。

今回の選挙はメールアドレスを用いた電子投票によって行われます。5月27日までにメールアドレスを登録いただいた会員は、電子投票が可能となります。

メールを使われない会員のみなさまには、投票用紙による投票も可能です。5月1日から6月14日の間に、斯文会館内日本中国学会事務局宛、書面もしくはfaxにてお知らせください。投票用紙をお送りいたします。

メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録頂いていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」（URL：<http://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274>）よりご登録をお願いいたします。

パスワードは sinology1234 です。

登録フォームにアクセスできなかった場合は、事務局（info@nippon-chugoku-gakkai.org）宛に、メールアドレスをお知らせください。

訃報

『学会便り』2021年第2号発行以降、次の方のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。
（敬称略）

進藤 英幸（関東地区）	逝去日不明
安東 諒（中国・四国地区）	2021年5月27日
村上 哲見（東北地区）	2022年3月12日

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会



第74回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第74回大会は早稲田大学が準備を担当し、本年10月8日（土）、9日（日）の両日、早稲田大学戸山キャンパス・大隈講堂・小野講堂にて開催することとなりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2022年4月吉日

日本中国学会第74回大会準備委員会

渡邊 義浩

記

1. 部 会 : 一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）
四、歴史
五、パネルディスカッション（次世代シンポジウム）
六、学会企画（書評シンポジウム）：応募方法等の詳細は「學會便り」本号21ページをご覧ください。
2. 時 間 : 一～四は発表20分に質疑応答10分、五は報告、質疑応答含め全体で120分以内。
3. 締 切 : 2022年6月27日（月）（当日消印有効。簡易書留、レターバック、EMS等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします）
4. 応募方法 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公開のものに限ります。一～四に応募される方は、氏名（フリガナ・所属研究機関および職位）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備会まで郵送すると同時に、それらの Word ファイル（.doc または .docx 形式） を E-mail（ファイル添付）により期日までに送付してください。E-mail 受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。五に応募される場合は、パネルの代表者がパネルリスト全員の氏名（フリガナ、所属研究機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備会宛てに送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。
※執筆者による校正はないため、完全原稿でお願いします。
5. 応募資格 : 研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です、特に五については、パネルリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。
6. 応募宛先・
問い合わせ先 : 〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学戸山キャンパス
E-mail : japansinology74@gmail.com

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文、四、歴史 五、パネルディスカッション 六、学会企画の六部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。

◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。

◎学会ホームページを随時ご覧ください。

以上